

日本農林漁業振興会会長賞・農林水産大臣賞受賞

山には竹を里には人を 今日なお生きる竹子共生会の教え

受賞者 ^{たかぜ} 竹子地区コミュニティ協議会

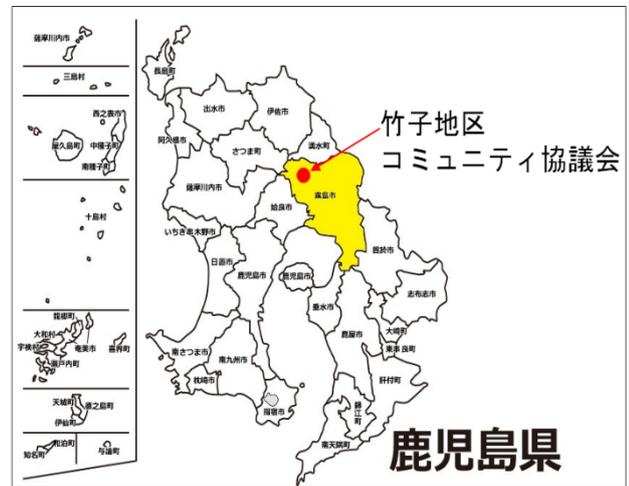
(^{きりしまし} 鹿児島県霧島市)

■ 地域の沿革と概要

霧島市は、県本土のほぼ中央に位置し、平成 17 年 11 月、国分市と姶良郡溝辺町・横川町・牧園町・霧島町・隼人町・福山町の 1 市 6 町が合併して誕生した。総面積は約 603 km²、人口は 122,441 人（令和 7 年 10 月 1 日現在）である。

市の北部には風光明媚な霧島山があり、南部は豊かで広大な平野部が波静かな錦江湾に接し、夏場の冷涼な気象条件を生かした丘陵森林農業地域と温暖な気候の田園住宅地域で農林水産業が営まれており、これらの気象条件等を活かしたお茶及び梨、ぶどう等の果樹、肉用牛、採卵鶏等の畜産が盛んである。

第 1 図 位置図



■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

竹子地区は、霧島市の北西に位置し、旧溝辺町の豊かな山林に囲まれた標高 330m 程度の丘陵地にあり、418 世帯、人口 780 人（令和 7 年 10 月 1 日現在）の地域である。

鹿児島空港や溝辺鹿児島空港 IC（九州自動車道）から車で 10 分程度と交通アクセスが良いところである。

「山には木を 里には人を」の郷土訓のもと、山づくりや人づくりに取り組まれ、今もその意気込みを受け継ぎ、様々な取組が行われている。

第 1 表 地区の概要

事項	内容	
地区の規模	集落の集合体	
組織の性格	地縁の集団	
人口等	総人口	780人
	総世帯数	418戸
農業経営体数 (内訳)	農業経営体数	259経営体
	個人経営体数	246経営体
	団体経営体数	13経営体
	(内、法人経営体数)	13経営体
農用地の状況 (内訳)	総土地面積	6,350ha
	耕地面積	1,180ha
	田	254ha
	畑	922ha
	耕地率	18.6%
	一経営体当たり耕地面積	4.6ha

注：人口等は竹子地区、それ以外は旧溝辺町の数値

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア 「竹子地区コミュニティ協議会」以前の取組

竹子地区のむらづくりは、古くは明治時代中期まで遡り、水田の水争いが絶えないことを憂いた青年たちが、地域一体となって課題解決に取り組むため、明治29年「竹子青年共正会」を立ち上げたことに始まる。翌年には、地区全戸参加の自治組織として「竹子共正会」と名称を変更し、財源確保のため官有林の払い下げを受け、雑木林を伐採し、造林事業の開始及び一部を採草放牧地として開拓するとともに、道路改修、神社修築などに取り組んだ。昭和20年頃には木が大きく育ち、収入が得られるようになり、道路拡幅、小学校増築、公民館活動、簡易水道の設置・運営など、竹子地区に還元する仕組みを構築してきた。

イ 竹子地区コミュニティ協議会へのあゆみ

竹子地区は、長年にわたり「竹子共正会」を中心とした住民自治とむらづくりに取り組んできたが、地元竹子小学校の児童数が平成元年の113名をピークに減少に転じ、平成25年には50名を切る状況になり、存続が危ぶまれるようになっていた。このように人口減少・高齢化等の今日的課題への対応が迫られるようになってきたため、「竹子小学校活性化委員会」を発足し、竹子小学校の活性化に向けた話し合い活動が始まった。

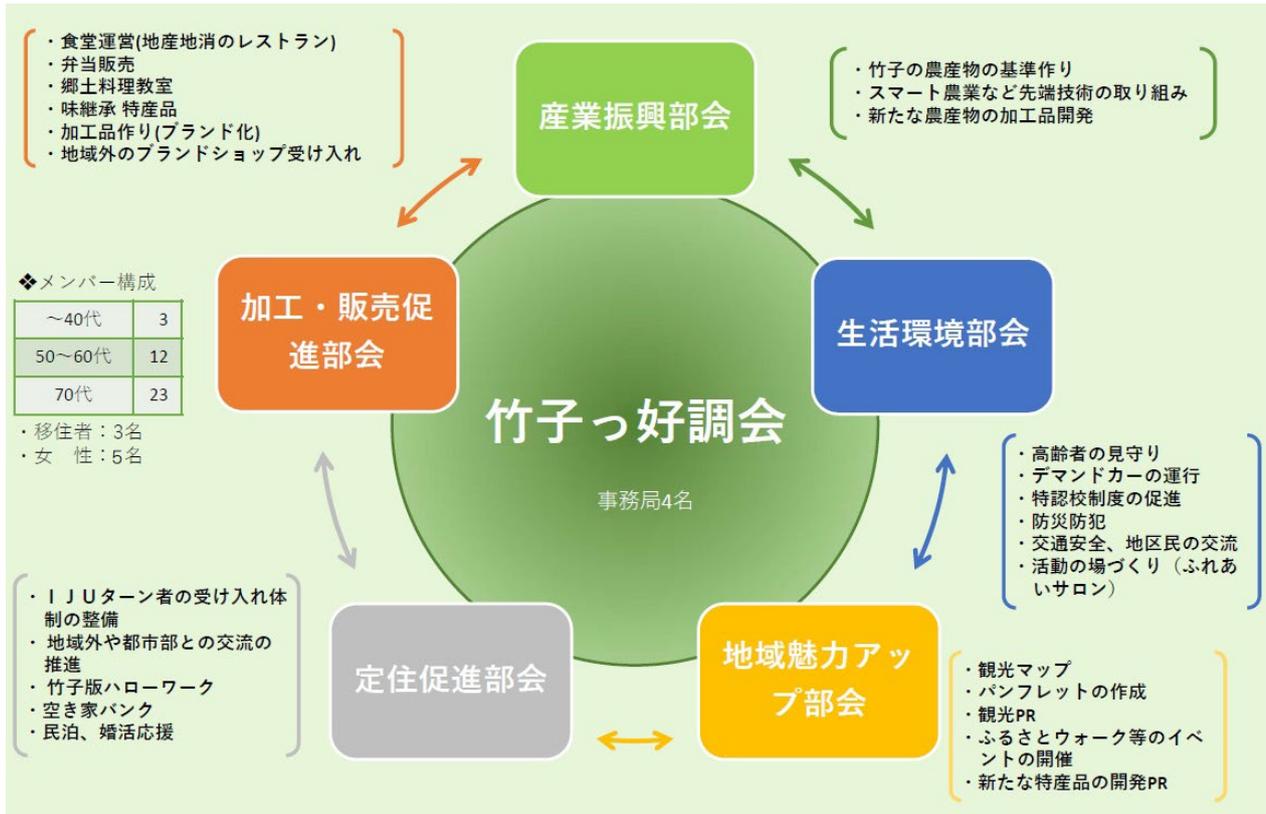
その後、「竹子小学校活性化委員会」は「竹子の里を考える会」に発展し、平成28年には地区全体の課題共有・現状把握を行い、解決策を検討、竹子地区の魅力発信、移住者の受入れ対策などを含む包括的な地域活性化案をまとめるとともに、地域外から児童を受け入れる特認校制度の導入や、鹿児島大学との民泊交流、ウォーキング大会の開催など地域外からの交流人口の拡大に努めてきた。

しかしながら、人口減少と外部への流出を食い止めるまでには至らず、いよいよ活性化案の実行が喫緊の課題となってきた。そこで、令和2年8月に、多彩な職歴、実績を有する人材を地域おこし協力隊員として配置し、移住者や共正会の有志による「竹子地区コミュニティ協議会」、愛称「竹子っ好調会」を実行部隊として組織した。

(2) むらづくりの推進体制

「竹子地区コミュニティ協議会」は、「竹子共正会」の出資を受け、連携して活動を行っている。「竹子の里を考える会」で整理された活性化案を実現するため、「竹子地域まちづくり実施計画」を作成し、「今日も明日も10年後も住みたい竹子」をスローガンに掲げ、産業振興部、生活環境部、地域魅力アップ部、定住促進部、加工・販売促進部の5つの部会を整備し、部会や会員同士の連携を図り活動している。令和7年4月時において、38名で構成され、移住者3名も含まれている。

第2図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

竹子地区コミュニティ協議会は、地域の人口減少や高齢化等の課題の深刻化に伴う地域活力の低下を新たな視点で解決するため、明治後期に創設された自治組織である「竹子共正会」（現在は公益財団法人）の有志により設立された組織である。竹林整備、特産加工品の開発、「ふれあいサロンたかぜバル」の設置、移住体験施設「さるくーる竹子」の開設、都市部のアンテナショップ「じゃっど☆ラボ」の開設など、ビジョンや話し合い活動に基づいた取り組みにより、地域農業の振興、交流人口・関係人口の拡大を通じた地域活性化を進めている。



写真1 竹林整備の様子

2. 農業生産面における特徴

(1) 竹子地区の「竹」を活かした取り組み

竹子地区では、林業の衰退や竹林需要の減少、安価な筍の輸入増加などにより竹林が放任傾向にあり、環境保全上の問題となっている。

「竹子っ好調会」では、会の運営費を自力で



写真2 筍の水煮、ドレッシング

稼ぐべく「竹で絶好調大作戦」と題し、竹子の「竹」のブランド力を活かしたプロジェクトを立ち上げ、取組を行っている。

令和6年度から竹林整備事業に取り組み、竹材販売のほか、筍の水煮や筍のドレッシングなど地産を生かした加工品の開発による収益を確保している。竹林整備を行ったことで、地域住民から、綺麗になった竹山を維持したいという声上がるなど、竹林整備に対する機運が高まっている。

(2) 農地の整備と新たな特産品づくり

竹子地区の北部に広がる畑地帯「竹子原（たかぜばる）」は、耕作条件が悪く、農業の近代化を進めるためには、基盤整備が必須条件として、昭和57年に県営畑地帯総合整備事業竹子原地区に着手し、137haの基盤整備と畑地かんがい導入された。

耕作条件が整い、担い手農家35戸を中心に、茶、果樹、畜産を主体とした農業が展開され、お茶、果樹を中心に後継者も確保され、現在196haの農地が維持されている。

また、担い手農家のうち、4人が「竹子っ好調会」のメンバーとして活動しており、令和4年度から、竹子の新たな特産品づくりの一つとして、担い手農家と連携し、梨とぶどうのミックスワインの製造、実証を行っている。食用の梨、ぶどう数種類を組み合わせ500mlに対し約0.6kgの果実を贅沢に使用している。初年度に手掛けた450本は、クラウドファンディングを利用した販売を行い、完売となった。規格外品などやむなく廃棄される農産物を活用した、竹子の特産品となるワインができたことでその流れが広がり、個人でもワインを作ってみようといった動きも出始め、6次産業化の促進にもつながっている。



写真3 竹子原の台地



写真4 梨とぶどうのミックスワイン

(3) 都市住民への「竹子」ブランドの魅力発信

竹子地区では、地区の魅力を直接都市住民に広く発信しようと、東京都出身の地域おこし協力隊員の協力のもと、令和5年、農村地域の1集落としては異例の都心のアンテナショップ「じゃっど☆ラボ」を東京都大田区に開設した。

23㎡ほどの店舗だが、竹子直送の野菜、果物、加工品を販売しているほか、農産物を使った総菜、弁当、菓子なども販売しており、鹿児島県出身者は



写真5 「じゃっど☆ラボ」

もとより大田区地元民をはじめ、関東圏からも多く来店し、コミュニティサロンとしても賑わいをみせている。この取組をきっかけに、「じゃっど☆ラボ」は、霧島市全体を巻き込んだアンテナショップとして、令和7年5月にリニューアルオープンしている。



写真6 「じゃっど☆ラボ」の店内

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) ふれあいサロンたかぜバル

竹子地区では、地域内に食堂が無いことや地域住民の交流の場が不足していることが課題となっていた。そこで、JA倉庫跡地を会員自らも参加して改修し、念願の地域の交流拠点「ふれあいサロンたかぜバル」を令和3年7月にオープンした。

「たかぜバル」とは、BAR（バル）と竹子地区北部の畑地帯「竹子原（たかぜばる）」をもじって名付けられた。昼は食堂やふれあいサロンとして使用し、夕方以降は予約制で、地域内唯一の居酒屋として営業し、地域住民の交流拠点として活用されている。

「たかぜバル」で提供される地産地消メニューは話題となり、地域外からの利用者も急激に増加し、交流人口の増加につながっている。

また、「たかぜバル」では、地域の筍を活用した筍の水煮やドレッシングの他、切り干し大根、竹子地区の地鶏を使った鶏飯の素や、スープなど様々な加工品を開発している。

なかでも郷土菓子（ふくれ菓子、あくまき）を使用したオリジナル菓子「灰！HIGH！！たかぜ」は、県外のホテル、大手スーパーに採用され販売が行われている。



写真7 「ふれあいサロン たかぜバル」の外観



写真8 「ふれあいサロン たかぜバル」の内部

(2) 竹子ふるさとウォーク

竹子地区では、霧島市旧溝辺町の出身者で構成される「東京みぞべ会」から「年に1度のイベントを地元で行いたい」という声が上がったことをきっかけに、平成25年から「竹子ふるさとウォーク」を実施しており、令和7年度で第14回を迎えている。

「竹子ふるさとウォーク」は例年9月に開催されており、地区内に広がる田園地帯で黄金色の稲穂と真っ赤な彼岸花が美しいコラボレーションを楽しめるイベントとなっている。美味しい霧島茶をはじめ地元の食材を使ったおもてなしが人気で、毎年200名近くが参加している。



写真9 ふるさとウォーク案内



写真10 ふるさとウォークの様子

(3) 竹子版空き家バンク（さるくーる竹子）

竹子地区では、「定住促進部」が中心となり、令和5年度から、地域の空き家を持ち主から借り受け、移住を考えている人が宿泊体験できる宿泊施設「さるくーる竹子」を開設している。

「さるくーる竹子」は、竹子地区での移住を考える家族連れなどが、一定期間、竹子での暮らしを体験できる施設となっており、移住後の地域とのミスマッチのリスクを減らすことが可能となっている。「さるくーる竹子」の体験を経て、現在までに3世帯が地域へ移住している。